

# 故郷会津の歴史と 有名人たち

平成30年2月8日

松本忠三郎

## 概要（目次）

- ・ 会津の象徴、傑出した磐梯の景色
- ・ 何故会津という地名に・・・古事記、日本書紀「相津」
- ・ 歴史 1・・・会津に前方後円墳が
- ・ 歴史 2・・・奥州藤原氏から芦名氏支配へ
- ・ 歴史 3・・・芦名氏の滅亡～蒲生氏郷の治世
- ・ 歴史 4・・・保科正之～松平容保
- ・ 歴史 5・・・戊辰戦争と白虎隊
- ・ 歴史 6・・・明治～斗南藩へ
- ・ 会津の有名人・・・徳一、松平容保、西郷頼母、山本覚馬、  
山川健次郎、山川捨松、柴五郎、池上四郎、松江豊寿、  
秩父宮妃世津子
- ・ 会津中学・高校と卒業生



磐梯朝日国立公園



裏磐梯と檜原湖  
明治21年の磐梯山噴火で



裏磐梯 五色沼



野口英世  
生家



天鏡閣（てんきょうかく）は、[福島県猪苗代町](#)にある旧[有栖川宮](#)・[高松宮](#)翁島別邸。



## 地名の由来

「古事記」「日本書紀」で、会津に関係する説話として四道将軍伝説が。

「崇神天皇は諸国平定のため4人の皇族将軍を北陸・東海・  
西道（山陽）・丹波（山陰）の4方面へ派遣。

北陸道へは大彦命、東海道へは武渟川別命（たけぬなかわわけ）

（大彦命の子）が派遣され、それぞれ日本海と太平洋沿いを北進しながら  
諸国の豪族を征服。

やがて2人はそれぞれ東と西に折れ、再び出会う。

この出会った地を「相津」（あいづ）と名付けた」

# 会津の歴史 1 蒲生氏郷が築城するまで

- 会津大塚山古墳
- 平安時代末期 奥州藤原氏 地を黒川という
- 鎌倉幕府成立 御家人・佐原氏に知行（相模三浦氏分流）
- 芦名氏に（佐原氏の後裔）
- 永仁2年（1294年） 芦名盛宗(五代) が黒川に諏訪神社  
その後300年間、芦名一族が
- 16世紀 芦名盛氏、戦国大名として佐竹、伊達、上杉と対抗
- 天正17年(1589年) 芦名義弘は伊達政宗に敗れ、黒川城去る
- 蒲生氏郷（秀吉の家来）が松坂より国替え
- 文禄2年（1593年）氏郷、黒川城を「鶴ヶ城」として若松に

## 会津大塚山古墳

会津盆地の東部に立つ大塚山の山頂に墳丘全長114メートルの**前方後円墳**。

築造年代は**4世紀末**と推測、東北地方では古い時期の古墳の1つ。

一箕古墳群では本古墳を含み**3基の大型前方後円墳**が確認、

他の2基の飯盛山古墳(飯盛山山頂)、堂ヶ作山古墳(堂ヶ作山山頂)は

本古墳よりも先の築造とする説が有力視。

昭和47年(1972年**年**)に「大塚山古墳」として**国の史跡**に指定。

後円部の中心から南北2基の割竹形木棺の痕跡が検出、  
南棺からは日本製の三角縁神獸鏡をはじめ多くの  
遺物が検出された。

また環頭太刀、靱(ゆき)、鉄製農耕具なども出土。

(東北大学考古学研究室が発掘調査)

平安時代末期まで奥州藤原氏の領地であったこの地は、  
黒川と呼ばれていた。

鎌倉幕府成立後には相模三浦氏分流の御家人・佐原氏に  
知行が与えられ、  
その後、佐原氏の後裔である芦名氏によって支配。

1189年

奥州合戦で奥州藤原氏、源義経、武蔵坊弁慶が滅亡

## 摺上原の戦い

戦国時代に蘆名盛氏が現われ最盛期を迎え、

奥州で伊達氏と並び称される有力大名となった。

佐竹義重の子義広を芦名家当主に迎えた。

天正18年(1589年)、奥州統一を目指す伊達政宗に

摺上原の戦いで大敗。

芦名義広は常陸に逃走し、芦名氏は没落。

この結果、黒川の地は伊達家の  
支配するところとなり、  
その翌年には小田原を平定し  
天下統一を進めていた豊臣 秀吉に  
没収され、秀吉の重臣・蒲生 氏郷が  
松阪国(三重県)より国替え。



蒲生氏郷 奥州入り

**一連の統一事業**に関わった功により、天正18年(1590年)の

奥州仕置において伊勢より陸奥国会津に移封され42万石、

のちの検地・加増により91万石の大領を与えられた。

これは奥州の伊達政宗を抑えるための配置。

36歳で会津40万石を与った蒲生 氏郷は、かつての葦名氏の居館  
黒川城を文禄2年(1593)に七層の天守閣をもつ城郭へ大改修。

その名を鶴が城とし、地名も自身の生まれ故郷の近江国日野にある  
“若松の森”にちなんで「若松」と改名。

幼い頃より織田 信長にその才能を認められ、側用人を務めた  
蒲生 氏郷は、武辺高く、また茶の湯や和歌に造詣を持つ  
一流の文化人でもあった。

氏郷は農業政策より**商業政策を重視**し、旧領の**日野・松阪の商人を若松に招聘**し、定期市の開設**楽市楽座の導入**、手工業の奨励等により、**江戸時代の会津藩発展の礎**を築いた。

### 千 少庵

妻は利休の娘亀。利休賜死後の千家再興の任に当たり、傑出した侘び茶人としての宗旦を育成して、千家茶道の完成に貢献した。

利休自刃ののち、会津の蒲生氏郷をたより、文禄3(1594)年赦免。

この間茶室**麟閣**を造る。京都に戻り、千家の相続者として**本法寺**前に利休屋敷を復興した。



氏郷は乱れていた若松城下を整備して武士と町人の秩序を作り、経済活性化に楽市楽座を推進し、前任国の松坂や郷里の近江から多くの商人や職人を呼び寄せた。

しかし2年後の文禄4年(1593)、氏郷は病に倒れ、**急逝**。  
暗殺説も囁かれる中、嫡男の秀之が13歳で家督を継承し、  
一応の安泰を見る。

ところが青天の霹靂のように、慶長3年(1598)秀之では幼弱のあまり  
家中を統率できないという秀吉の断言で、  
下野国宇都宮18万石(栃木)に減封された。

会津若松は、越後から転封した上杉 景勝に領され

(豊臣秀吉に仕え、豊臣家五大老の1人として、会津藩120万石を領した。秀吉の死後、徳川家康が景勝討伐に向かい関ヶ原の戦いが幕開け)

江戸時代に入と、またもや蒲生氏が復権。

さらに伊予松山国(愛媛)の加藤氏へと、領主は変わります。

その後、寛永20年(1643)加藤氏は四十万石の封土を幕府に召し上げられ、

三代将軍・徳川 家光の異母兄弟で信濃国(長野県)

高遠藩の藩主・保科家の養嗣子となっていた保科 正之が、

会津四郡23万石、南山5500石余の幕府領を預かることとなった。

保科正之は、徳川2代目将軍・秀忠の実子として江戸に生まれた。

身元は明かされず、武田信玄の次女である見性院（けんしょういん）

の元で養育される。

最後に見性院の縁で、旧武田氏家臣の**保科正光の**

**養子**となり、保科を継ぐという、ちょっと変わった

人生を歩む。

成長した正之は、今でいう幕僚・指揮官の補佐の

ような仕事に就いた。



保科正之 1611～72(慶長16～寛文12)

江戸前期の大名，会津藩主。徳川秀忠の三男。母は神尾（かんお）氏お静の方。

家光の異母弟。信濃国高遠藩主保科正光の継母が家康の異父妹であった縁で，

1617年(元和3)正光の養子となる。

31年(寛永8)家を継ぎ高遠藩3万石の藩主となり，従五位下肥後守に叙任。

その後36年出羽山形20万石に移り，43年会津23万石を領した。

藩政においては家臣団編成・農政にすぐれた手腕を示し，江戸時代前期の名君

の一人に数えられる。

この時、徳川幕府は3代将軍・家光の時代。

正之の素直で謙虚な人柄にほれ込んだ家光は、彼をととても信頼し、その関係は生涯つづいた。

**将軍・家光の信頼がととても厚かった正之。**

4代将軍・家綱の後見人的な立場になった彼は、最善の政治を行い、江戸幕府が長く続く決定的な政策をいくつも打ちたて実施した。

彼が活躍したのは政治の場だけではない。

家光は死の直前に彼を呼び、「徳川を頼む」と言い残した。

その信頼にこたえるべく、保科正之は1668年（寛文8年）に

『会津家訓十五箇条』を定めた。

特に幕末の悲劇で知られている会津藩が代々守り続けたこの教えの

第一条には、

「会津藩たるは將軍家を守護すべき存在であり、藩主が裏切るようなことがあれば家臣は従ってはならない」と記されている。

この正之の孫である三代・正容(まさかた)は、  
元禄9年(1696)幕府より松平の姓と葵の  
紋を与えられ、親藩としての地位を安堵される。

爾来、代々の会津藩主は、

初代・正之の朱子学的な精神と徳川直系の格式と  
気風を幕末まで守り続けた。

その学び舎が旧・会津藩校「日新館」で、これは五代藩主・松平 容頌  
(かたのぶ)を補佐した家老・田中 玄宰(はるなか)が開いたもの。

寛延3年(1750)容頌は7歳で藩主となりますが、当時の財政は40万両を  
越える借金に窮していた。

そこで藩内きっての英才・田中 玄宰を登用し、大改革に着手。

まず、乱れていた藩士の教育を再生し、就学を義務づけ、文武一体と  
産業政策を掲げた。

この玄宰の改革によって、文化元年（1804）藩校・会津日新館が完成。

学問所だけでなく、天文台、図書館、水泳教練用の池、木版印刷所なども備えた高等な学校でした。

会津藩士の10歳以上の子息はすべてここで学ぶこととなり、実学尊重の精神を修得していった。

# 戊辰戦争

慶応4年 閏 4月20日～明治元年 9月22日  
(西暦1868年6月10日～11月6日)

戊辰(つちのえたつ、ぼしん)は、[干支](#)の一つ。

干支の組み合わせの5番目で、前は[丁卯](#)、次は[己巳](#)である。[陰陽五行](#)

では、[土壬](#)の[戊](#)は陽の[土](#)、[土二支](#)の[辰](#)は陽の[土](#)で、[比和](#)である。

新政府軍 75、000人

会津藩 9,400人

藩兵 3,500人

その他 5,900人

慶応4年(1868)、会津藩を滅ぼすために陸続と攻めて来た官軍に  
対し、藩は藩士を再編成し、  
50歳以上は玄武隊、36歳から49歳までは青龍隊、  
18歳から35歳までは朱雀隊、  
そして少年である15歳から17歳までを白虎隊として、  
最期の一人になるまで戦うことを誓い合いあった。

フランス式の近代戦術を導入した会津藩だが、  
圧倒的な火力と兵力を率いる官軍の前に屍を  
重ねていく。

そんな中、

白虎隊隊士自らの嘆願に、藩主・松平 容保は  
出陣を認めた。



新堀の洞門

白虎隊は、猪苗代街道でついに戦闘へ突入したが、雨あられと飛んで来る弾丸に倒れながら退却。その二番隊は新堀の洞門を這いくぐり、飯盛山の中腹にある巖島神社の境内へたどり着いた。

しかし時すでに遅く、眼下に望む鶴が城には火の手が上がっていた。

黒煙にけむる城下町には官軍の銃砲が轟き、敗走と睡眠不足に疲れ切った少年たちを絶望の淵へと陥らせた。

「この上は、生きて虜囚の辱めを赦さず、潔く会津武士として散ろう」

互いの目を見つめ合い、胸を刺し貫く者。みごとに割腹し果てる者。

その潔くも哀しい姿は唯一救命された隊士・飯沼 定吉によって後年

明らかになったが、筆舌に尽くしがたき光景として涙を誘う。

今日も飯盛山にひっそりと立つ隊士たちの墓には、

多くの会津若松市民、全国からの旅人が訪れ、香華が絶えることは

ありません。





白虎隊碑建設委員会

総裁 高松宮殿下

会長 近衛文麿

その他国を挙げての行事となった。

白虎隊十九士が眠る地に佇む碑。その太い柱の上では鷹が今にも飛び立とうとしている。

昭和3年、白虎隊の武士道の精神に共感を覚えたローマ市から寄贈された。

表面に「文明の母たるローマは、白虎隊勇士の遺烈に、不朽の敬意を捧げんがため

古代ローマの権威を表すファシスタ党章の鉞（まさかり）を飾り、永遠偉大の

証たる千年の古石柱を贈る」、裏面に「武士道の精神に捧ぐ」と刻まれていた文字は、

第二次世界大戦後に連合国軍によって削り取られた。

鮮やかな紅葉と共に味わう、会津と世界のつながりの歴史—

（文字は復刻されているが、まさかりは行方不明）

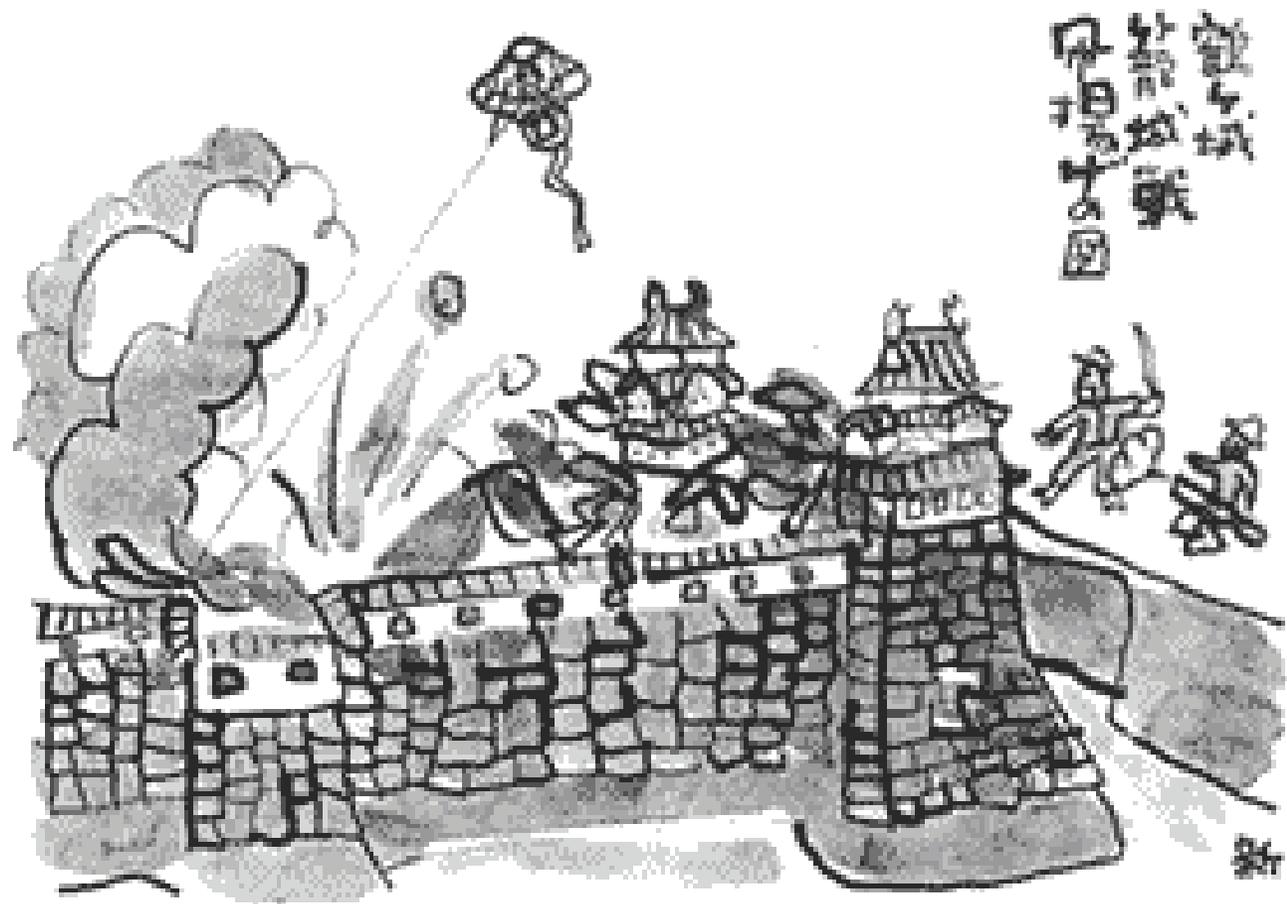
明治元年(1868年)8月、会津の鶴ヶ城は、城の東側にある小田山から砲弾が雨あられのようにうちこまれ、そのたびに城内各折から黒煙が上がった。砲弾がうち込まれるばかりでなく、城は十重、二十重に囲まれて、アリのはい出るすきまもなかった。

籠城していた会津軍もけが人が続出し、決死の部隊が城外に出撃して、戦いをいどんだが、大勢をくつがえすまでにはいならず、孤立無援の絶望的な籠城戦が果てしもなく続くといった毎日でした。

そんなある日、鶴ヶ城の本丸から、するすると凧があがりました。

凧は砲煙をかいくぐって大空高く舞い上がり西軍を啞然とさせるとともに、城内の将兵の士気を高めるために籠城中の少年があげたのです。

その時の凧が会津唐人凧で、あげた少年は、藩校日新館の生徒であつたと伝えられています。



## 降伏

会津藩は会津若松城に籠城して抵抗し、佐川官兵衛、山口二郎（[齊藤一](#)）らも城外での遊撃戦を続けたが、9月に入ると頼みとしていた米沢藩をはじめとする同盟諸藩の降伏が相次いだ。

孤立した会津藩は明治元年9月22日（11月6日）、新政府軍に降伏。

同盟諸藩で最後まで抵抗した庄内藩が降伏したのはその2日後。

旧幕府軍の残存兵力は会津を離れ、仙台で榎本武揚と合流し、蝦夷地（北海道）へ向かった（箱館戦争）。

## 斗南藩

1868年（明治1）所領を没収されて禁錮（鳥取藩預け）に  
処せられたが、翌年赦免されて家名再興が許され、  
嗣子容大(ししかたはる)が北郡・三戸郡・二戸郡内において  
3万石を与えられて立藩した。

藩名には「**北斗以南皆帝州**」の気概が込められていた。

明治3年春から閏10月にかけて、17、327人が移った

## 辛苦きわめた下北での生活

下北方面に移った人びとの困窮ぶりは、目を覆うばかりだった。

乾燥させ粉状にした海藻（押布（おしめ））を鍋に入れて量をかせぎ、

飼料用大豆や松木の白皮まで食料にした。のちに陸軍大将となった柴五郎は、

犬肉に辟易（へきえき）したと述懐している。

（石光真人編『ある明治人の記録』）。

犬の肉を無理して喰らえども、ついに喉につかえて通らず、口中に含みたる  
まま吐き気を催すまでになれり。 この様を見て父上余を叱る。

「武士の子たるを忘れしか。戦場にありて兵糧なければ、犬猫なりとも  
これを喰らいて戦うものぞ。 賊軍に追われて辺地にきたれるなり。  
会津の武士ども餓死して果てたるよと、薩長の下郎どもに笑われるは、  
のちの世までの恥辱なり。

ここは戦場なるぞ。会津の国辱雪ぐまでは戦場なるぞ。」

(「ある明治人の記録」より)

松前藩

明治維新前

弘前藩

黒石藩

盛岡藩

盛岡藩  
飛地

八戸藩

秋田藩

館藩

明治2年

斗南藩

弘前藩

黒石藩

七戸藩

斗南藩

八戸藩

松代藩  
取締地



# 会津若松城の現在と会津戦争直後

現在の写真



会津戦争直後の写真



創設

1898年

## 歩兵第29連隊

• 1925年（明治31年）1月27日 -

廃止

1945年

• 衛戍地を仙台川内から福島県会津若松に転営

- ・ **会津29聯隊に1942年(昭和17年)1月15日 - 留守隊より戦用被服届く。**
- ・ **熱地用被服であったため南方行きを知る。9月27日 - 連隊はラバウルに集結、**
- ・ **ガダルカナル島攻略の命令を受ける。**
- ・ **10月5日 - ガダルカナル島上陸開始、10月29日 - 軍旗は菊紋、旗竿(二分割)、**
- ・ **房に分割、土中に埋めて遮蔽していたが連隊長と第7中隊長の鈴木了大尉は**
- ・ **軍旗を捧持して連隊長と共に敵陣に向かったとされる。**

軍旗覆い及び紐は旗護は兵の上等兵が掌握、兵站病院で戦死後  
十一中隊第四分隊長が背囊より発見、本部暗号班長の手に渡り  
、現在は福島県伊達市保原町に現存する。

10月？日 - 連隊長古宮大佐は戦死したとも自決したとも言われる。

のち、軍旗は**生存者30名前後**によって土中埋没処理が行われる。

24～26日までの**戦死者は将校31名、准士官以下490名。**

# 会津の有名な人たち

松本忠三郎

**徳一**（とくいつ）は奈良時代から平安時代前期にかけての法相宗の僧。

最澄（天台宗）とのあいだでやりとりされた所謂三一権実諍論や、

空海に対して密教についての疑義を提示したことなどで知られる。

東国への教線の拡大を企図する最澄に対し、徳一は教学の論争を挑んでその前に立ちはだかった**旧仏教側の論客**であった。

**藤原仲麻呂の乱**、奈良時代に起きた叛乱。**恵美押勝の乱**ともいう。

孝謙太上天皇・道鏡と対立した太師(太政大臣) 藤原仲麻呂（藤原恵美押勝）が軍事力をもって政権を奪取しようとして失敗した事件。

	<b>徳一菩薩</b>
宗派	<u>法相宗</u>
寺院	<u>慧日寺</u>

徳一の開創あるいは徳一が活動したことを伝える寺院が数多くある。

陸奥国・[会津](#)の[慧日寺](#)や[勝常寺](#)、常陸国の[筑波山](#)・[中禅寺](#)([大御堂](#))、[西光院](#)など

陸奥南部～常陸にかけて多くの寺院を建立したとされる。

現在、[慧日寺跡](#)([福島県耶麻郡磐梯町](#))には**徳一の墓**と伝えられる[五輪塔](#)が残されている。

**勝常寺**には平安初期の木造薬師如来・日光菩薩・月光菩薩像が伝えられており、

徳一との関係も指摘されている。

■ 国宝 木造薬師如来坐像



地方稀にみる古像で、像高141.8cmケヤキの大材から彫り出してから前後に二つに割り内ぐりをして、剥ぎ合わせている。

造形よくととのい刀法もまた整備したもので、奈良朝の作風をのこした平安初期の作とみられる。

**面相の森厳、体軀堂々その形は極めてすぐれたものである。**

なお光背は欠損があるが当初のもので天平時代に流行した宝相華葡萄唐草を浮き彫りし、飛天を配した見事な作である。

薬師堂の本尊であって**室町初期の大堂宇**とともに、天下に冠たるものである。

■ 国宝 月光菩薩立像 / 国宝 日光菩薩立像



本尊薬師如来の脇侍。ケヤキの一木彫で天平時代の乾漆の手法を用い、  
両像とも顔容体躯が豊満で、普通の弘仁仏にみる背低く感じがなく、  
すらりとのびた天平様式を多分にもった端麗な容姿で中尊の作風に似ている。

蓮台の文様も天平様式である。

寺伝では、日光・月光両菩薩が逆で、

明治36年国指定の時に現在の名称に変えられたものである。

## 松平容保

天保6年(1836年)12月29日、高須藩藩主・松平義建の六男として生まれる。

第10代藩主松平義建には子が多く、**次男は尾張藩第14代**

**藩主徳川慶勝、三男は石見浜田藩主松平武成、五男は高須藩第11代藩主**

**から尾張藩第15代藩主、さらに後には御三卿一橋家当主となった**

(名乗りも松平義比→徳川茂徳→徳川茂栄と変遷)。

**六男が会津藩主松平容保で、九男が桑名藩主松平定敬と幕末に活躍した**

**藩主。十男の義勇は高須藩第13代藩主となっている。**

実の叔父にあたる会津藩第8代藩主・容敬（高須松平家出身）の養子となる。

神道（敬神崇祖における皇室尊崇）、儒教による「義」と「理」の精神、そして会津藩家訓による武家の棟梁たる徳川家への絶対随順から成り立っており、のちの容保の行動指針となった。

## 戊午の密勅

安政5年8月8日（1858年9月14日）に孝明天皇が  
水戸藩に勅書（勅諭）を安政下賜した事件である。

「密勅」は正式な手続（関白九条尚忠の裁可）を  
経ないままの下賜であったことによる。

- 勅許なく 日米修好通商条約（安政五カ国条約）に調印した
- ことへの呵責と、詳細な説明の要求。
- 御三家および諸藩は幕府に協力して公武合体の実を成し、
- **幕府は攘夷推進の幕政改革を遂行せよ**との命令。
- 上記2つの内容を諸藩に廻達せよという副書。

以上の3つに要約することができる。

将軍の臣下であるはずの水戸藩へ朝廷から直接勅書が渡されたという  
ことは、幕府がないがしろにされ威信を失墜させられたという  
ことであったため、幕府は勅条の内容を秘匿し、大老井伊直弼による  
安政の大獄を起こす引き金となった。

とりわけ、鶉飼吉左衛門から安嶋宛への書簡には、井伊暗殺の秘事が記されて  
いたとされ、幕府にその内容が漏洩したことで安政の大獄では、より嚴重な  
処分となったといわれる。

これに続き容保は問題となっていた水戸家への直接の  
**密勅の返還問題**に着手。

家臣を水戸に派遣し武田耕雲斎・原市之進らの説得にあたらせる一方、容保は委細を幕府に言上し言いなだめ、  
一滴の血も流さずして勅書を返上せしめ、解決に至らせる。

## 幕府水戸間の調停と幕政参画

万延元年(1860年)、**桜田門外の変**が起こる。

老中久世広周・安藤信正は尾張と紀伊に水戸家問罪の兵を

出させようとしたが、容保はこれに反対し徳川御三家同士の争いは

絶対不可なるを説き、**幕府と水戸藩との調停に努めた**。

これには家茂も容保の尽力に感謝した。

松平容保 京都守護職就任 文久2年(1862年)28歳

閏8月1日京都守護職に就任。

再三これを固辞したが、政治総裁職**松平春嶽**や幕臣達は

日夜勧誘に来た上で、**会津藩家訓**を持ち出し

「土津公ならばお受けしたたろう」と言い詰めより、

辞する言葉もなくなり奉命を決心する。

家老の西郷頼母、田中土佐らは薪を背負って火を救おうとするようなもの。

おそらく労多くして功少なし」と、言辞凱切、至誠面にあふれて戒める。

しかし容保は、「それはじつに余の初心であったが台命しきりに下り

臣子の情誼としてもはや辞する言葉がない。

聞き及べば余が再三固辞したのを一身の安全を計るものとするものが

あったとやら。

そもそも我家には宗家と盛衰存亡を共にすべしという藩祖公の遺訓がある。

卿ら、よろしく審議をつくして余の進退を考えてほしい」とのこと

であったので、家臣いずれも容保の衷懐に感激し、

「この上は義の重きにつくばかり、君臣共に

京師の地を死に場所としよう」と、君臣肩を抱いて涙したという。〔

京壬生村の浪士残留組の差配を幕府より命じられ、  
近藤 勇、芹沢鴨ら17名の浪士から会津藩へ  
嘆願書が提出される。

彼らを「会津藩お預かり」とする。

## 八月十八日の政変

8月13日、大和行興の詔が発せられる。しかしこれは真木和泉による

討幕のための偽勅であり、長州藩はすでに錦旗・武器を準備し、

有力六藩に対し軍用金を醸出させる勅命（偽勅）も発せられる。

容保は驚愕し、急ぎ公武合体派の中川宮に奏請。

近衛前関白・二条右大臣の賛成を取り付ける。

8月16日、中川宮はひそかに参内して奸臣を

除く議を奏上。同日、孝明天皇より

「国家の害を除くべし。容保に命を伝えよ」との真勅が下る。

七卿落ちとなり、謹慎蟄居を命じられた三条実美を

始めとする過激攘夷派の七卿は逃亡し京から離れた。

孝明天皇より宸翰ならびに御製二首を賜る。

「公卿達が暴論をつらね、その不正や増長は耐え難く、  
その方へ内命を下したところ速やかな憂患掃攘と朕の存念  
貫徹の段、全くその方の忠誠にて、深く感悦の余り…」と

天皇は容保の忠誠を称えた。

## 孝明天皇宸翰

1863年（文久3年）に、八月十八日の政変を行った礼に、  
会津藩主松平容保に送られた。

同時に、御製も送られた。

これを松平容保は、**竹筒に入れ**生涯誰にも見せることなく、  
亡くなった。

## 蛤御門の戦い [元治元年7月19日](#) ([1864年8月20日](#))

6月5日、**池田屋事件**起こる。

7月18日夜、**禁門の変(蛤御門の戦い)**起こる。

**征長問題**

**鳥羽・伏見の戦**



西郷 頼母（さいごう たのも、[文政13年閏3月24日](#)（[1830年5月16日](#)） - [明治36年](#)  
[（1903年）4月28日](#)）は、[江戸時代後期](#)（[幕末](#)）の[会津藩](#)の[家老](#)。

[文久2年](#)（[1862年](#)）、[幕府](#)から[京都守護職](#)就任を要請された容保に対し、  
政局に巻き込まれる懸念から辞退を進言したために、[容保の怒りを買う](#)。

西郷頼母の母、妹2人、妻、5人の娘は慶応4年8月23日

(1868年10月8日)、

頼母の登城後に親戚12人と共に自邸で自害した。

## 山本 覚馬

幕末の会津士、砲術家、明治時代の地方官吏、[政治家](#)。[京都府](#)顧問、府議会議員（初代議長）として初期の京都府政を指導した。

また、[同志社英学](#)（現[同志社大学](#)）の創立者・[新島襄](#)の協力者として、現在の同志社大学今出川校地の敷地を譲った人物としても知られている。

「[同志社](#)」は覚馬の命名といわれる。

新島襄の妻 新島八重

## 管見

『管見』 慶応4年(1868年)6月、覚馬が新政府に宛てて出した

(御役所宛てとなっている)、政治、経済、教育等22項目にわたり

将来の日本のあるべき姿を論じた建白書である。

自分の見解(管見)と謙称している。

## 山川 健次郎

1854年9月9日 (安政元年閏7月17日) - 1931年 (昭和6年) 6月26日) は

明治時代から昭和初期にかけての日本の物理学者、教育者。

男爵、理学博士。

東京帝国大学理科大学長・総長、九州帝国大学初代総長、

京都帝国大学 (京都大学の前身) 総長、貴族院議員、枢密顧問官を歴任した。

- ・ 嘉永7年(1854年) - 会津藩士・山川重固の三男として生まれた。
- ・ 明治元年(1868年) - 会津戦争。若松城開城後、猪苗代に謹慎の後、
- ・ 越後に脱走、長州藩士・奥平謙輔の書生となる。
- ・ 明治4年(1871年) - 斗南藩再興のあと、アメリカへの国費留学生に
- ・ 選抜され渡米。
- ・ 明治8年(1875年) - イエール大学で物理学の学位を取得し帰国。

- ・ 明治9年 ([1876年](#)) - [東京開成学校](#) (翌年、東京大学に改編) 教授補になり、
- ・ 明治12年 ([1879年](#)) - 日本人として初の物理学[教授](#)になる。
- ・ 明治21年 ([1888年](#)) - 東京大学初の[理学博士](#)号を授与された。
- ・ 明治34年 ([1901年](#)) - 48歳で[東京帝国大学総長](#)となる。

明治38年 ([1905年](#)) - [日露戦争](#)後に、政府を非難した教授が処分を受ける事件 ([戸水事件](#)) が起こり東大総長を辞任。

明治40年 ([1907年](#)) - 安川財閥 ([安川敬一郎](#)・[松本健次郎](#)親子) の資金拠出による明治専門学校 (現[九州工業大学](#)) の設立に協力、初代総裁となる。

明治44年 ([1911年](#)) 4月1日 - [九州帝国大学](#)の初代総長となる。

[大正](#)2年 ([1913年](#)) 5月9日 - 再び東京帝国大学の総長となる。

- ・ 大正3年([1914年](#))8月19日 - [澤柳事件](#)を承け、[京都帝国大学](#)の総長を兼任する(1915年6月15日まで)。
- ・ 大正9年([1920年](#)) 東京帝国大学の総長を退任。
- ・ 昭和6年([1931年](#))の胃潰瘍は改善せずに衰弱し、6月半ばからは呼吸困難に陥り、6月26日に池袋の自邸で死去した。

父：山川重固 ([会津藩](#)国家老)

兄：**浩 (陸軍少将、男爵)**

姉：操 ([明治天皇](#)フランス語通訳兼[昭憲皇太后](#)付女官、[小出光照](#)の妻)

姉：[二葉](#) (女子教育者・東京女子高等師範教諭)

妹：[捨松](#) ([元老](#)・[大山巖](#)公爵の妻)

妻：柳 (りゅう、[建築家](#)・[辰野金吾](#)の妻の妹)

長男：洵 ([日本農芸化学会](#)副会長、[東京帝国大学](#)教授、男爵)

四男：[建](#) ([文部省](#)局長、山川浩家を承継。貴族院議員)

次女・佐代子 ([九州帝国大学](#)教授・理学者・寺野寛二の妻)

三女：照子 ([東京都知事](#)・[東龍太郎](#)の妻)

孫：建重 (東海区水産研究所所長、農学博士、男爵)

## 山川捨松

安政7年（1860年）、会津若松の生まれ。父は会津藩の  
国家老・山川尚江重固（なおえ しげかた）で、  
2男5女の末娘である。

さきが生まれたときに父は既に亡く、幼少の頃は祖父の  
兵衛重英（ひょうえ しげひで）が、  
後には長兄の大蔵（おおくら、後の山川浩）が  
父親がわりとなった。



慶応4年（[1868年](#)）8月、板垣退助・伊地知正治らが率いる

新政府軍が会津若松城に迫ると、数え8歳のさきは家族と

共に籠城し、負傷兵の手当や炊き出しなどを手伝った。

女たちは城内に着弾した焼玉の不発弾に一斉に駆け寄り、

これに濡れた布団をかぶせて炸裂を防ぐ「**焼玉押さえ**」という

危険な作業をしていたが、さきはこれも手伝って  
大怪我をしている。

すぐそばでは大蔵の妻が重傷を負って落命した。

このとき城にその大砲を雨霰のように撃ち込んで  
いた官軍の砲兵隊長が、

薩摩藩出身の大山弥助（のちの大山巖）だった。

11歳の時、岩倉使節団とともに渡米。

女子を留学させるという文化は、当時では全く考えられないことで、

このときに捨松の両親は「捨てるつもりで待つ」という意味

を込めて、名を「捨松」と改名。

しかしアメリカでの捨松は非常に優秀でした。英語を習得し、

名門校であるヴァッサー大学に入学。

そこでの成績も非常に優秀だった上、洗練された美しさと知性を持つ捨松は、

大変人気者でした。

帰国した捨松は大山巖から結婚の申し込みを受けます。

しかし相手は、会津戦争で砲兵隊長を務めた男です。

当然家族は猛反対しましたが、巖の熱意に負け結婚。

できたばかりの鹿鳴館で結婚式を挙げ、

以降捨松は日本人としては垢抜けた性格とセンスの

良さで、**鹿鳴館の花**と呼ばれました。

柴 五郎、

1860年6月21日 (万延元年5月3日) - 1945年 (昭和20年)

(2月13日) は、日本の陸軍軍人。

軍事参議官・台湾軍司令官・東京衛戍総督・第12師団

長を歴任し、階級は陸軍大将勲一等功二級に至る。

義和団の乱の防衛戦で賞賛を浴び、欧米各国から数々の

勲章を授与された。



会津藩士(280石)・柴佐多蔵の五男として生まれるが、会津戦争によって

祖母・母・兄嫁・姉妹が自刃し一家は主家共々に陸奥国斗南(青森県むつ市)に

移住する。

藩校・日新館、青森県庁給仕を経て1873年(明治6年)3月、陸軍幼年学校に入校。

1877年(明治10年)5月、陸軍士官学校に進み、1879年(明治12年)12月、

陸軍砲兵少尉に任官され、翌年12月に士官学校を卒業する。

士官生徒第3期の柴の同期には、上原勇作元帥や内山小二郎・秋山好古・

本郷房太郎の各大将がいる。

1899年 (明治32年) 10月の陸軍中佐進級を経て1900年 (明治33年)

3月、清国公使館附を命ぜられる。

駐在武官として着任まもない5月、**義和団の乱**が起こる。

暴徒が各国の大使館を取り囲み、日本公使館書記生の杉山彬や

ドイツ公使ケットレルが殺害される。

柴は公使・西徳二郎の下で居留民保護にあたり、また他国軍と協力して

60日に及ぶ籠城戦を戦い、その功を称えられた。

**義和団の乱**      1900年に起こった、中国の清朝末期の動乱である

当初は義和団を称する**秘密結社**による排外運動であったが、

1900年 (光緒26年)に**西太后**がこの叛乱を支持して清国が6月21日に

欧米列国に宣戦布告したため**国家間戦争**となった。

だが、宣戦布告後2か月も経たないうちに欧米列強国軍は首都北京及び

紫禁城を制圧、清朝は莫大な賠償金の支払いを余儀なくされる。

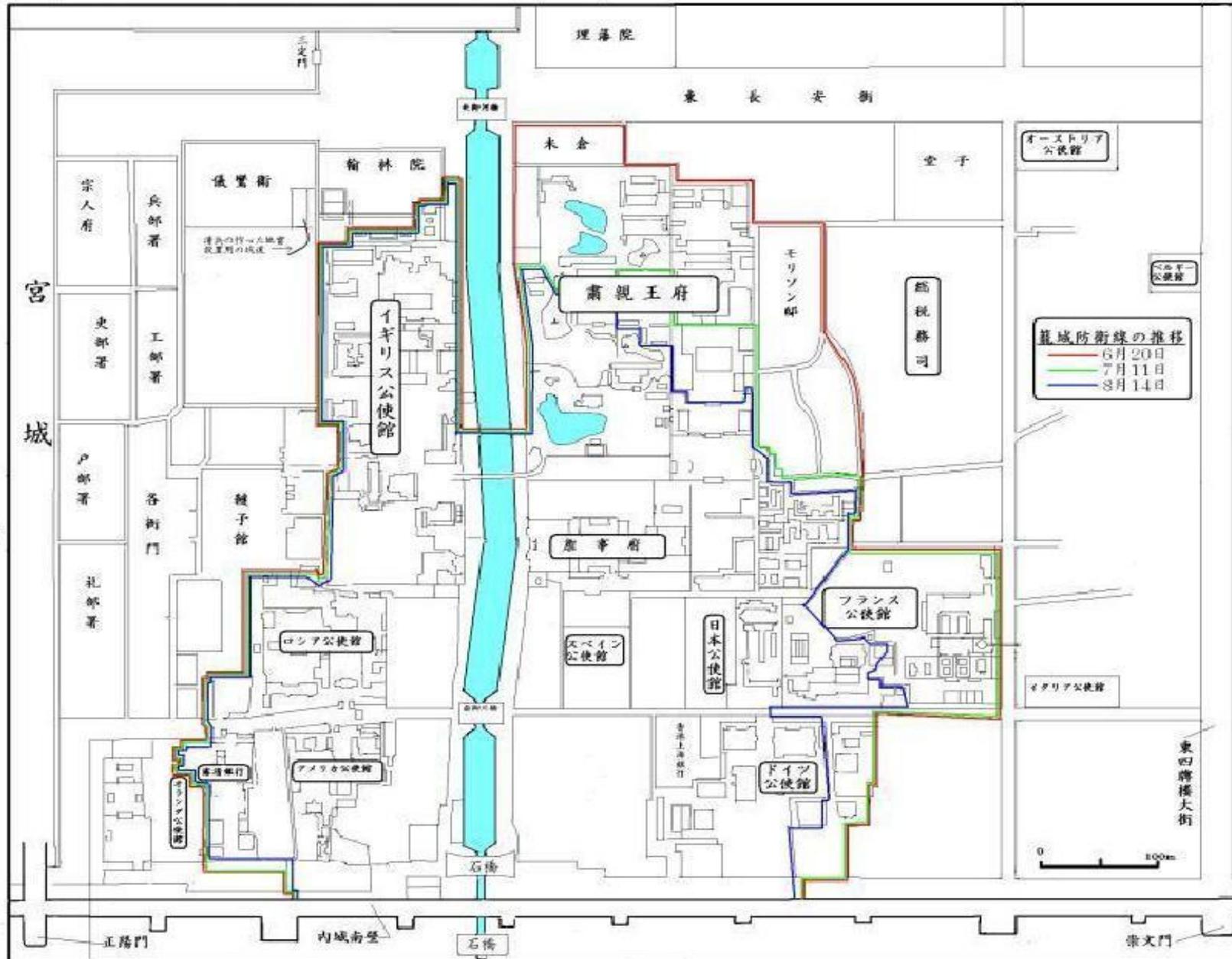
## 籠城の開始

清朝の宣戦布告は、清朝内に在住する外国人及び中国人クリスチャンの孤立を意味するも同然であった。

特に北京にいた外国公使たちと中国人クリスチャンにとっては切迫した事態を招来した。

当時 紫禁城 東南にある東交民巷というエリアに設けられていた公使館区域には、およそ外国人925名、中国人クリスチャンが3000名ほどの老若男女が逃げ込んでいた。しかし各国公使館の護衛兵と義勇兵は合わせても481名に過ぎなかったという。

義和団の乱当時の東文民芸（各国公使館所在地） 北



南

## 『北京の55日』

([英語: 55 Days at Peking](#)) は、[1963年](#)に製作・公開された[アメリカ合衆国の映画](#)。

清朝末期に[義和団の乱](#)が起こり、首都[北京](#)に義和団が押し寄せて、

外国人居留区が包囲されて11か国の居留民が籠城して55日間を戦った物語を

描いている。

[ニコラス・レイ](#)監督で主演は[チャールトン・ヘストン](#)、

[エヴァ・ガードナー](#)、[デヴィッド・ニーヴン](#)

アメリカ映画であるため欧米人側から描かれ、アメリカ人ルイス少佐を中心とした西洋人の活躍が目立つ内容だが、**実際の義和団の乱鎮圧においては、距離的に近かった日本とロシアが主力**となった。

また、作品中では義和団は悪役として設定されているが、現在の中国では、欧米の帝国主義的侵略に対抗した義民として肯定的に評価されている。

また義和団が掲げる旗印が当時の「扶清滅洋」ではなく「京都」になっているなど、考証が不十分な場面が含まれる。

## 柴五郎

この籠城にあって日本人柴五郎の存在は大きく、**籠城成功に多大な寄与をした**と言われる。

柴五郎は当時砲兵中佐の階級にあり、北京公使館付武官として清朝に赴任していた。

籠城組は各国の寄り合い所帯であったため、まず意思疎通が大きな問題となったが、

**英語・フランス語・中国語と数か国語に精通する柴中佐はよく間に立って相互理解に大きな役割を果たした。**

またこの籠城組の全体的な指導者はイギリス公使[クロード・マクドナルド](#)であったが、

籠城戦に当たって**実質総指揮を担ったのは柴五郎であり**

(各国中で最先任の士官だったため)、

解放後日本人からだけでなく欧米人からも多くの賛辞が寄せられた。

なお柴五郎は、明治期の政治小説『[佳人之奇遇](#)』で有名な[東海散士](#)こと

[柴四朗](#)の弟にあたる。

松岡圭祐著 「黄砂の籠城 上・下」

初代駐日イギリス公使・大使であり、枢密顧問官でもあったサー・クロード・マックスウエル・マクドナルドは、公の場で以下のような声明を発している。

「日本人こそ最高の勇気と不屈の闘志、類い希な知性と行動力を示した。

素晴らしき英雄たちである。とりわけ日本の指揮官だった柴五郎陸軍砲兵中佐の冷静沈着にして

頭脳明晰なリーダーシップ。彼に率いられた日本の兵士たちの忠誠心と勇敢さ、

礼儀正しさは特筆に値する。十一カ国の中で、日本は真の意味での規範であり筆頭であった。

私は日本人に対し、ここに深い敬意を示すものである」

この声明ののち、日英同盟は締結された。

1945年 (昭和20年)、太平洋戦争敗戦後に身の整理を始め

9月15日に自決を図る。

老齢のため果たせなかったが、同年12月13日、その怪我がもとで病死する。

墓所は会津若松市・恵倫寺。

同市のかつて兵営があったところに柴の生家跡をしめす石碑がある。

池上 四郎

第6代大阪市長、

第6代朝鮮總督府政務總監。

秋篠宮文人親王妃紀子は曾孫に当たる。



1857年会津藩士池上武輔(250石)の四男として、陸奥国耶麻郡

(現・福島県会津若松市)で生まれる。

会津戦争時に四郎は、兄の三郎と共に会津若松城に籠城した。

白虎隊への入隊を強く希望したが、15歳以上の規約のため数えで12歳の四郎は除外された。

砲弾が撃ち込まれる中で、四郎は年少組の仲間と共に

**唐人凧をあげて自軍の士気を鼓舞**したというエピソードが残っている。

開城後は再興を許された斗南藩へ父母に連れられ一家六人で移住  
その後、四郎は兄の三郎を頼りに上京。

横浜正金銀行の柳谷卯三郎の書生となり、苦しい生活の中で勉学に  
励んだ。

1877年、池上は警視局一等巡查として採用され、間もなく警部として  
石川県に赴任。

1900年には大阪府警察部長となり、その後13年間に渡って  
大阪治安の元締めとして活躍した。

1913年、市政浄化のため、池上は囑望されて、肝付兼行の後任として  
大阪市長に就任した。

財政再建を進める一方、都市計画事業や電気・水道事業、  
さらには大阪港の建設などの都市基盤を整備し、近代都市への脱皮を  
図った。

御堂筋を拡張し大阪のメインストリートとする計画は、池上の市長時代に  
立案され、続く関 一市長時代に実現し、大大阪時代の全盛期を迎える  
こととなった。

四郎の父・武輔は会津藩御使番、190石、  
六女の紀子（いところ）は

内閣統計局長となる川嶋孝彦と結婚。

その孫が秋篠宮文仁親王妃紀子である。

〔天王寺公園にある銅像〕



松江 豊寿(まつえ とよひさ)

1872年7月11日(明治5年6月6日) -

1956年(昭和31年)5月21日)は、

日本の陸軍軍人、政治家。

最終階級は陸軍少将。

第9代若松市長。



第一次世界大戦中に**板東俘虜収容所**所長を務め、

在任中にドイツ人俘虜を人道的に扱い地元の

住民とドイツ人俘虜を交流させた。

この時、ドイツ人俘虜によって日本で初めて**ベートーベン**の

**交響曲第9番**が演奏された。(今より丁度百年前)

今年、収容所跡に松江豊壽の銅像が建立される。

映画『バルトの楽園』の主人公としても知られる。

1872年6月に現在の会津若松市で会津藩士、警察官・松江久平の長男として生まれる。

1889年（明治22年）16歳の時に仙台陸軍地方幼年学校入学後、1892年（明治25年）には陸軍士官学校（5期）に入学。

1894年（明治27年）には22歳で陸軍歩兵少尉に任官される。

1904年（明治37年）には韓国駐劄軍司令官長谷川好道大将の副官を任せられる。

1907年（明治40年）に浜松の歩兵第67連隊附少佐に昇任、1908年（明治41年）には第67連隊大隊長、1911年（明治44年）に第7師団副官と順調に昇進を重ねる。

日清・日露戦争にも従軍した彼は1914年（大正3年）1月には陸軍歩兵中佐となり、徳島歩兵第62連隊付となる。

**俘虜収容所長時代** 同年7月に第一次世界大戦が勃発。

青島の戦いで日本軍に降伏したドイツ軍俘虜は、徳島や大阪など  
全国12ヶ所の収容所へ振り分けられた。

それと同時に松江は同年12月徳島俘虜収容所長に任命される。

1917年には12ヶ所の収容所が板東など6ヶ所にまとめられ、

同年4月に板東俘虜収容所長となる。

ここにおいて松江はドイツ人の俘虜達に人道に  
基づいた待遇で彼らに接し、

可能な限り自由な様々な活動を許した。

賊軍としての悲哀を味わった会津藩士の子弟に  
生まれた体験が、大きく彼の良心的な  
人格形成に影響したといわれる。

また、付近の人達と俘虜との交流や技術指導も盛んに行われ養鶏・養豚  
・野菜栽培から建築・設計まで広い分野で交流が行われたと言う。

1920年4月、第一次大戦終了に伴い板東俘虜収容所は閉鎖された。

だが、俘虜たちは解放された後もここで受けた温かい扱いを忘れず

「世界のどこに松江のような(素晴らしい)俘虜収容所長がいたんだろうか」と

語るほどだったと言う。

その後1922年2月、少将となり軍を去った松江は、  
同年12月に第9代若松市長となる。

1956年5月に[東京都狛江市](#)の自宅で死去。

(今年俘虜収容所跡に松江豊壽の銅像が建てられる予定)



pixta.jp - 10642786

## 秩父宮妃勢津子

宮家に嫁ぎ、会津の汚名をそそいだ妃（1909-1995）

父松平恒雄は優秀な外交官で、母は皇后の御用掛。

天皇の弟、秩父宮に嫁ぐという縁談が舞い込んだ。

そこには大正天皇の後の深い思惑があったのだ。



勢津子の祖父は松平容保。

勢津子が選ばれた理由

そもそも貞明皇后が、なぜ勢津子を選んだかといえは、  
やはり理由は会津にあった。

貞明皇后の父は九条道孝とって、幕末までは関白も務める  
家柄の公家だった。

明治維新の際に、官軍が組織され、

全国に部隊が派遣されると、**九条道孝は奥羽先鋒総督**とって  
東北に向かう部隊の総大将を務めた。

当初、会津藩は降伏の意志を伝えてきた。

九条道孝はそれを受け入れて平和裏に会津城を接收しようと考えた。

だが配下についた主戦派の参謀に押し切られ、結局、戦争を招いてしまった。

会津の人々は朝敵の汚名を負い、敗戦後も厳しい暮らしを余儀なくされた。

一方、九条道孝は、戦争を抑えられなかったことを悔いていたのだろう。

娘である貞明皇后が、その遺志を引き継いだのだ。

朝敵の汚名を晴らすには、会津藩主の血を受け継ぐ姫を、

宮家の妃といて迎えることが一番だ。

そのために秩父宮妃は、どうしても勢津子でなければ

ならなかったのだ。

結婚は昭和3年9月28日。昔の暦でいうと戊辰の年だ。

暦は60年で一巡する。

会津戦争を含め奥州での一連の戦争は、戊辰戦争といって、

ちょうど60年前の戊辰の年に起きていた。

まして9月28日は、会津藩が正式に降伏した日だった。

もともとは勢津子自身の意図ではなかったものの、

この結婚は会津の人々に、大きな喜びをもたらせた。

60年もの長きに渡った汚名が、ようやくそそがれたのだ。

福島県は幕末、計11の藩が林立していた。断トツの大藩は会津・松平家23万石であった。

だから他県の例にならえば、福島県の県庁と県立一中は会津に設置されてしかるべきだった。だが、明治政府は県庁を福島にもってきた。

福島藩はたった3万石の小藩にすぎなかったが。

また県立の最初の中学は、守山藩の郡山に創設した。

現在の安積（あさか）高校である。

守山藩はやはり2万9千石の小藩で、水戸徳川家の支藩にすぎなかった。

親藩だったが、戦わずしていち早く官軍側に寝返っている。

## **会津における中学の扱い**

**会津中学は1890（明治23）年に私学として開設された。**

**1899（明治32）年にようやく県に移管されて、**

**今日の会津高校の前身となった。**

**ただし県立二中（現磐城高校）、県立三中（現福島高校）に**

**次ぐ「四中」にはさせてもらえなかった。**

**明治新政府により忌避されたのである。**

司馬遼太郎は『王城の護衛者』で、「会津松平家というのは、ほんのかりそめな恋から出発している」と書いている。

会津高校がナンバースクールになれなかった淵源は、この「かりそめな恋」にある、いっても過言ではないのだ。

徳川2代将軍秀忠といえ、やはりNHKの11年の大河ドラマ『江～姫たちの戦国～』のヒロイン・江が3度目に嫁した相手である。

だが、江の死後、秀忠に婚外子がいることが判明した。

保科正之で、のちに会津の初代藩主となった。つまり、正妻である江に隠れて秀忠が浮気をしたことで、会津藩が誕生したのである。

# 新城 新蔵

会津若松市に生まれ 安積中学卒業

1873年（明治6年）8月20日 - 1938年（昭和13年  
8月1日）は

日本の天文学者・東洋学者、理学博士。

専門は宇宙物理学および中国古代暦術。

戦前における東洋天文学研究の権威。

第8代京都帝国大学総長。



## 会津中学の出身者

政治家では、自民党の実力者でありながら金権政治には無縁のクリーンさで

知られた**伊東正義**という卒業生もいた。外相や内閣官房長官などを歴任、

竹下 登 1989年にリクルート事件で首相を退任

竹下登（島根県立松江中・現松江北高校卒）の後任に押され固辞した際の

「本の表紙を変えても、中身を変えなければ・・・」というフレーズが有名である。

**柏村信雄**は警察庁長官を、やはり警察官僚出身の**川島広守**は、内閣官房副長官

やプロ野球コミッショナーをした。

経済界では、日曹コンツェルン創業者の**中野友礼**、大蔵官僚出身で  
日本不動産銀行の初代頭取をした**星野喜代治**、  
大成建設社長をした**本間嘉平**、旭硝子社長をした**倉田元治**、  
秋田銀行頭取をした**前田実**らが卒業している。  
**伊藤文大**はクラレ社長、**北村清士**は東邦銀行頭取である。

学者では、政治学、理論経済学、法社会学など幅広い学問領域を  
こなした**小室直樹**、前原子力規制委員会委員長**田中俊一**、  
国立天文台副台長の天文学者・**渡部潤一**が著名である。

小室は母子家庭で貧しく、同級生**渡部恒三**（衆議院副議長）が  
生活を援助した。

さらに、梅毒の研究をした医学者で大阪医科大学長をした**松本信一**、  
歯学者で日本大学総長をした**鈴木勝**、農林経済学者で京大教授のあと  
平安女学院院長をした**菊地泰次**、国際法学者で青山学院大学長をした  
**大平善梧**らもOBである。

スポーツでは、ハーフマラソン日本記録（1時間0分25秒）を持つ  
**佐藤敦之**がいる。

高久 晃 (1933年 - 2015年) は、日本の医学者。専門は脳神経外科学。医学博士。

[富山医科薬科大学](#)医学部脳神経外科学教室教授(初代1980年-1997年)、

富山医科薬科大学学長(1997年-2003年)。

脳神経外科顕微鏡手術に優れ脳神経外科手術の治療成績と安全性の向上、国内外の若手医師の指導など幅広く脳神経外科の発展に寄与する。

2016年3月27日、富山市シティホールにて富山大学脳神経外科同門会・高久家合同お別れの会が開催された。

- [東北大学](#)医学部奨学賞銀賞 (1967年)。
- [富山新聞](#)文化賞 (1997年)。
- [福島県](#)県外在住功労者知事表彰 (2009年)。
- [瑞宝重光章](#)受章 (2009年春)
- [叙位正四位](#) (2015年12月13日)

# 高久 晃 君 お別れの会

高校同級生を代表して松本が弔辞を

